

第2回 吉井川水系自然再生計画検討会

議事録

日時：令和7年10月9日（木）13時00分～15時00分

場所：国土交通省岡山河川事務所2階会議室（WEB併用）

(1) 検討会の規約・委員追加、公開規定

- ・規約・公開規定は、前回の検討会から内容に変更無し。
- ・別表の委員名簿に「中嶋委員」を追加。
- ・委員総数10名のうち10名全員出席しており、委員の半数以上の出席により検討会は成立している。

(2) 吉井川水系自然再生計画について（資料1）

- ・意見無し。

(3) 前回検討会の委員意見への対応について（資料2・資料3 1章～4章）

（委員）資料2_P6 新田原井堰の上流側の河床変動について、資料には昭和55年～平成7年の変化が示してあるが、最近5年～10年がどう変化しているか、分かれば教えて欲しい。

新田原井堰の敷高が少し地盤高より低いところにあるため、上流側では少し洗堀傾向にあると思われるが、そのあたりが気になる。

（事務局）資料3のP9に平均河床高が記載してありますが、詳細が分かりづらいため、次回検討会で示す。

（委員）資料2のP20 アユ産卵場の造成はしないという理解でよいか。

（事務局）今回吉井川においては、アユは「保全・回復優占種」に選定しておらず、アユの産卵場やアユの降下環境については、この自然再生事業の中で優先して行っていくようには考えていない。

（委員）吉井川の場合、最下流は吉井堰でアユが産卵するが、距離がありすぎて鴨越堰を流下する個体が少ない。まだはっきりと決まてはいないが、鴨越堰と坂根堰に依頼して今月～来月の初めごろの期間、夜の間だけ余分に水を放流してもらうこととしている。

（委員）資料3のP62 [REDACTED] ワンド・たまりについて、イメージ図が資料にあるが、事業の際には色々なところから意見を聞いて、構造を検討してほしい。

（事務局）承知した。

（委員）ワンド・たまりの創出候補箇所について、東大寺の瓦の積み出し港がこの近くにあるため、この箇所でも見つかる可能性がある。もし事業を実施する場合は、早めに史跡調査をした方が良い。すぐ上流の20.8k付近で浚渫した時には、東大寺の瓦が原型のまま何枚か出てきた。破片もたくさん確認された。

（事務局）事業を実施する際には留意する。

（委員）[REDACTED]

（委員）現在、H30豪雨の水害対策等を至る所で実施しており、現時点で魚道の改修の予定はないが、過年度に実施されたような仮設魚道等の設置を許可することは可能と考えている。

（委員）予算面等もあると思うが、検討して頂ければ良いと思う。

（委員）資料3のP12 干潟・ヨシ原の対象種としてヒバリがあるが、ヒバリが干潟・ヨシ原に生息するイメージがない。干潟・ヨシ原を再生した後の評価時にヒバリが増えたとなるのか疑問である。

（委員）ヒバリは特にヨシ原に依存する種として考えている。

- (委員) ヨシ原に続く草原でヒバリが生息している。岡山県では特に指定していないが、東京や神奈川などでは絶滅危惧種となっている。
- (委員) 資料3のP59 乙子のヨシ原はヨシとアイアシが中心のヨシ原であり、アイアシの方が面積が大きい箇所もある。そのため、「アイアシ」も資料に記載してほしい。また、乙子の干潟について、特に吉井川本川に面した方が徐々に洗堀されているところがたくさんある。そのあたりも保全しながら干潟の創出を考えるというような計画を考えてほしい。
- (事務局) 依存する環境としてヨシ原を代表的に記載しているが、特に吉井川の河口においてはアイアシも重要であると考えているので記載を修正する。
干潟の保全についても事業メニューに含めているので、干潟やそこに生息する生物についてモニタリングを行いつつ、変動がある場所については対策を行っていく必要があると考えている。
- (委員) 資料3のP59 永江川河口部の乙子の干潟について、中嶋委員から現地視察で指摘があったように、浜崖のような状態になってきている。その上流にある干田川河口水門下流の干潟は、現地で見ただけで、干潟再生実施にあたり、十分なポテンシャルがあると思われる。水制工等を設置し干潟を拡大していくと、その下流側にも砂が堆積していく可能性もあるのではと思う。そのあたりも含め土砂動態解析をしながら、干潟の拡大について検討して行ってほしい。乙子の干潟の維持・拡大と干田川河口水門下流側の左岸の干潟の再生をセットで考えていくのが良いと思う。
- (委員) 資料3のP51 右上のタナゴの写真は、イタセンパラではないか。吉井川には生息していないので、吉井川の生息種に変えた方がよい。また、紫の線・点線は吉井川本川の周りに広がっていくイメージか。
- (事務局) 写真は誤った種を入れているため修正する。紫の点線は、自然再生事業を実施することで短期的には吉井川本川内で自然環境が回復・再生し、中長期的には支川を通じて流域内全体に効果が拡大していくことをイメージしたものである。
- (委員) 資料3のP51のタナゴ類の写真の説明において「在来タナゴ類等(氾濫原性魚類)の生息環境拡大」とされているが、氾濫原性魚類の代表的な種として、在来タナゴ類は妥当と言えるか？氾濫原性魚類を示す文献等を調べて頂き、確認してほしい。
- (委員) 資料2のP19 ニホンウナギの情報は、何かの図鑑と思うが、著作権の関係で載せるのは大丈夫か？
- (事務局) 資料に出典を記載する。

(4) 吉井川水系自然再生計画(素案) <説明資料> 5章、6章について(資料3)

- (委員) 資料3のP72 特に乙子ヨシ原や干潟など地域住民や流域の住民には意外と知られておらず、あまり関心を持たれてない。今回の自然再生事業に関心を持ってもらう活動を色々行う必要がある。水辺の楽校などの記載があるが、現在岡山河川事務所はどのような関わりを持っているのか。
吉井川下流域で活動されている [] などの地域活動との連携も考えていく必要がある。自然再生事業の中でも地域住民やボランティアの参加が必要となってくる場合もあるので、地域住民参加も考えながら長い目で地域連携をしてほしい。10月18日に乙子干潟の観察会を山南公民館が行う予定である。この活動ともうまく連携してほしい。
- (事務局) 金剛川水辺の楽校では、事務所も活動に参加してパネル展示や流域治水の紹介などを行っている。また、地元の漁協にも協力頂き、水生生物の水槽展示や親子で実際に水生生物を捕獲してもらう体験会など地域住民に関心を持ってもらうための地域活動を行っている。なお、くまやま水辺の楽校は特に参加していない。
また、10月18日に乙子干潟の観察会には事務所からも2名参加する予定である。こういった形で地域活動との接点も持ちつつ、より広く住民の方にも自然再生事業の広報を行う必要があると考えている。
- (委員) [] 資料3のP51 紫の点線を将来的には鴨越堰くらいまで広げてほしい。
- (委員) []
- (委員) 資料3のP69 地形測量は具体的にどのような手法を考えているのか。グリーンレ

レーザーなどで面的に地形が把握できるようにするのか。汽水域の水質は、鉛直方向で変化するので鉛直分布の調査も必要になってくるが、どう考えているのか。例えば塩分濃度などが鉛直方向で変化する。

(事務局) 地形測量ではグリーンレーザー等を使用し、面的に把握することを考えている。また、汽水域で塩分濃度などが鉛直方向で変化する箇所はその把握が必要であると考えている。モニタリング手法の詳細を決定する際に検討したい。

(委員) 干潟・ヨシ原の再生後、リターやゴミが溜まり、ヨシ原が傷んでいくため、モニタリングの項目に加えて頂きたい。また、地域連携の他事例のページでヨシの植栽の話が掲載されていたが、干潟を整備すれば自然にヨシ原が創出されるわけではないため、ヨシやアイアシの植栽についても計画的に取り組み、その際にあわせてモニタリングを行うことで健全なヨシ原が創出されていくと考えられる。

(事務局) モニタリング項目として検討したい。

(委員) 上流域に流木があると、伐採してほしいと言われる。流木を伐採するとゴミが下流に流れやすくなる。河川内の流木は伐採しない方が流速は遅くなるため良いと聞いた。昔の河川は河原や草地が多く、水の流れはゆっくりで水質が綺麗だったと思う。今は、苫田ダムができて水質が悪くなった。苫田ダムができる前と比べると、水生生物は半分以下になり、消失した魚もいる。

(委員) 樹林化はなるべく避けた方がいい。樹林化が進むと河積を阻害するため、洪水の時にあふれて堤防が決壊するなどの大きな被害につながる。樹林をいかに管理していくかが課題である。ダムができると水質が悪くなるという話は、ダムが貯水することがある程度原因になっているかもしれない。ダムの弾力的運用でダムの水を放流することで水質の向上につながるのではないかと。

(事務局) 樹林の伐採については、流下能力の阻害が起きないように、全体のバランスをみながら必要な箇所を実施していく必要があると考えている。ダムについては水質改善を実施しているところもあるため、取り組みを引き続き実施していく必要があると考えている。

(委員) 河川環境にとっては洪水時にフラッシュすることが必要だが、過剰に流木等が流れて悪影響を及ぼすことは良くない。流木等が過剰にならないよう樹林の管理をして頂くと良いと思う。

(委員) 20年前、鴨越堰の下流で塩分濃度の測定をした。海の塩分濃度3.3%前後だが、鴨越堰の下流から赤穂線の鉄橋付近の範囲では3.6~3.7%の値が出ていた。なぜ塩分濃度が高くなるのか。そこからさらに下流側は海の塩分濃度と同程度であった。また、ヤマトシジミが減少したり、一時期、放流したヤマトシジミの身が真っ赤になるなどの被害があった。原因が分かれば教えて欲しい。

(事務局) 原因等分かれば、次回の検討会で説明する。

(委員) 鴨越堰の下流に深掘れ箇所がある。そこへ溜まった塩分は普段の流れでは抜けない。そういった原因もあるかもしれない。

(委員) 資料3のP70 ワンド・たまりの創出に関するモニタリング項目のうち、魚類の調査で

資料3のP69 干潟・ヨシ原の再生に関するモニタリング項目のうち、鳥類の調査時期は繁殖期と越冬期になっているが、オオヨシキリ・シロチドリは繁殖期にモニタリングし、チュウシャクシギは越冬期にモニタリング調査するのか。

(委員) チュウシャクシギは渡りの時期である春先のため、オオヨシキリ・シロチドリの繁殖期と同じ時期になると思われる。

(事務局) 鳥類のモニタリング時期は、丸山委員からお話し頂いたとおり、オオヨシキリは繁殖期、シロチドリ・チュウシャクシギは渡りの時期にモニタリングすることを考えている。

(委員)

(事務局) モニタリング方法を決定する際の参考にする。

以上